

五三・二%)。小学校段階でも階層差がある(上位=三九・七、中位=三三・八、下位=二四・〇%)。過去十二年間で通塾率の格差が縮まっていないとすれば(中学生の場合、八九年と〇一年とで通塾率は減少傾向にあったことから、その可能性は高い)、第1章で見た塾に行っているものといないものとの間の学力格差の拡大は、階層的な格差の拡大を伴いながら進んでいたものであると推測できる。つまり、塾に行けない子どもたちにみられた著しい学力の低下は、階層的に不利な環境に育った子どもたちの学力低下と重なり合っていると考えられるのである。

4. 新学力観と階層、学力

以上の分析から、新しい学力観に主導された教育の十年間で、学力の階層差が拡大している可能性が示唆された。なるほど、「旧学力が落ちても、新学力がつけばよい」といった言い分もあるだろう。多少「知識・技能」を中心とした詰め込み型の学力が落ちても、「自ら学び考える」「自ら課題をみつけ解決する」<生きる力>が、体験学習などを通じて身につけばよいという主張である。

しかしながら、そもそも新旧二つの学力は互いに無関係の、別々のものなのか。それとも相互に補う関係にあるのか。今回の調査では、「調べ学習」や「グループ学習」に積極的に取り組んでいるかといった、新しいタイプの授業への取り組みについてもたずねている。「関心・意欲・態度」までを学力に含めて考える新学力観からすれば、こうした授業への取り組み自体が、「新学力」を表すことになる。

それでは、新旧学力の間にはどのような関係があるのだろうか。ここでは、今回の学力テストの結果(国語と算数・数学の合計点)をもとに子どもたちを得点順に並べ、各グループに含まれる人数がほぼ等しくなるように4つのグループに分けた(それぞれを上位、中の上位、中の下位、下位と呼ぶ)。そして、このグループごとに、新学力的な学習への取り組みを調べた。

このような手続きに基づき、今回の「学力調査」でとらえた“旧”学力と、新学力との関係を示したのが表2-4である。中学生についてみると、「調べ学習に積極的に活動する」のは学力上位グループで五一・〇%に対して学力下位グループでは二六・一%と約半分にすぎない。「グループ学習の時はまとめ役になることが多い」についても、上位=三七・五%、下位=十七・七%と二倍の差がある。小学生の場合も、それぞれ二〇ポイント以上の差が出ている。つまり、かなり基礎的な内容である(旧)学力テストの得点と、調べ学習やグループ学習への取り組み(意欲・態度面での「新学力」)との間には、明確で強い関係が存在するのである。学力上位グループの子どもたちにとっても、必ずしも新学力

表2-4 新学力観的な授業への取り組みと受けたい授業(学力4段階別)

(単位：%)

	小学校					中学校				
	上位	中の上位	中の下位	下位	下位	上位	中の上位	中の下位	下位	下位
取 組 み の 取 組 み の 取 組 み										
調べ学習の時は積極的に活動する	58.1	56.3	50.8	36.2	36.2	51.0	38.8	32.6	26.1	26.1
グループ学習の時はまとめ役になることが多い	45.2	32.7	35.7	21.5	21.5	37.5	25.9	21.8	17.7	17.7
自分たちで調べる授業	45.2	51.3	42.9	37.7	37.7	49.9	42.8	42.5	36.5	36.5
自分たちの考えを発表したり、意見を言いあう授業	15.9	14.4	24.1	30.0	30.0	15.9	22.2	25.6	32.3	32.3
受けた い 授 業										
「とても受けたい」 + 「まあ受けたい」	50.4	56.7	42.9	36.9	36.9	38.6	26.9	28.3	31.9	31.9
「とても受けたくない」	17.8	13.3	21.4	31.2	31.2	24.8	32.5	34.9	34.2	34.2
全く受けたくない										

観的な活動への関わりが強いとはいえないものの、基礎的な教科の内容についての理解が不十分な子どもたちにとってはなおさらのこと、より発展的な学習ともいえる「調べ学習」や「グループ学習」への関わりは、かなり弱いものとなっている。

さらに、こうした調べ学習や発表する授業などを生徒が望んでいるかどうかと、今回のテスト得点との関係を見ると、そこにも明瞭な関連が見いだせる。表2-4には「受けたい授業」について学力四段階別に分析した結果のうち、新学力観的な授業についての数値もあわせて示した。中学生について見てみると、「自分たちで調べる授業」を「とても+まあ」受けたいと希望する生徒は、学力上位グループで四九・九%に対して学力下位グループで三六・五%と約十三ポイントの差がある。小学生についても、上位と下位の差が中学生ほどではないにしても、統計的に有意な差となっている。表中の「全く受けたくない」と回答した児童・生徒の数値に着目すると、基礎学力の低い生徒ほど、そうした授業を希望していないことが明らかとなる。中学生の、「自分たちの考えを発表したり、意見を言いあう授業」についての結果が、学力上位と下位の差が九ポイントである点を除けば、新学力観的な授業を「全く受けたくない」と回答する児童生徒は、学力上位と下位で、十三～十六ポイントもの差となっているのだ。

しかも、新学力についても、家庭の文化的階層の影響が表れる。表2-5によれば、中学生の場合、「調べ学習に積極的に取り組む」は、上位の階層グループで五一・〇%なのに対して、下位では二四・八%にとどまる。「グループ学習の時にまとめ役になることが多い」についても、上位=三五・六%、下位=十六・七%と二倍以上の差が生じている。そして、小学校段階においても同様に大きな格差が確

認できる。文化的階層下位グループの子どもたちにとって、新学力観的な学習活動に積極的に関わるものはごく少数にとどまるのである。今回の調査と別に行った学校現場へのヒアリング調査によれば、

表2-5 新学力観的な授業への取り組み(文化的階層グループ別)(%)

	小学校			中学校		
	上位	中位	下位	上位	中位	下位
調べ学習の時は積極的に活動する	64.1	49.0	40.1	51.0	36.6	24.8
グループ学習の時はまとも役になることが多い	46.5	32.0	24.0	35.6	26.3	16.7

数値はいずれも「とても」または「まあ」と答えた者の割合。

調べ学習の時に一体何をしたいのかわからないまま過ごしてしまう子どもがいるといわれる。グループ学習では一人ぐらい参加していなくてもほかの子どもが活動することで、かわからない子どもがいることに教師が気づかないまま、それなりに作業が進んでいくこともあるという。体験を通じて意欲が高まり、自ら学ぶ力も伸びていくはずだとされているのだが、意欲が高まる手前で、体験的な学習に積極的に関わろうとしない子どもができてしまうのである。しかも、そうした子どもたちは、知識や理解の点で基礎的な学力を十分身につけていない子どもであり、生まれ育つ家庭環境の面でハンディを負った子どもである。“旧”学力同様に、体験的な学習への積極的な関わりに象徴される“新”学力においても、家庭環境の影響が生じているのだ。

意欲や興味・関心は、どの子ども同じように持っているわけではない。同じように引き出すことができるわけでもない。基礎学力がきちんと身につけていない子どもたちに、基礎・基本を学ぶ時間を削ってまで新学力観的な授業を増やしていけば、家庭の文化的環境による格差が、新旧いずれの学力においても拡大していくだろう。以上の分析が示すのは、他の国々でも繰り返し指摘されてきた、「子ども中心主義」教育と階層格差拡大の問題が、日本においてもあてはまることを示している。

5. 小学校の授業経験と中学校時の学力

それでは、「新しい学力観」のもとでの学習経験は、その後の学習にどのような影響を与えているのか。つぎに、中学生の学力調査の結果を、小学校時代の授業経験の違いとの関係からみる。それによって、小学校で拡大・普及した「新学力観」型教育の影響について検証が可能になる。

今回の調査では、中学生を対象に、小学校時にどのような授業を受けたかを聞いている。その内容は、

- ① 教科書や黒板を使って先生が教えてくれる授業
- ② ドリルや小テストをする授業
- ③ 宿題がでる授業